

太平洋戦争にまつわる体験記

西村 謙之助 92 歳

登校中に遭った空襲(機銃掃射)

川西市をこよなく愛して在住 60 年、私は終戦前の昭和 20(1945)年の夏、鳥取県中東部の小学校(国民学校)5 年生であった。山ぎわの通学路を二列縦隊になって高等科の生徒が前後について集団登校していた時のことである。

遠い西空から飛行機の爆音がいつもと違った `キーン、という金属音に変わりながら近づいてきた。

`パンパンパンパン、と耳を<sup>つんざ</sup>劈くような連続射撃音に驚いて上級生リーダーの `伏せ!、の指示に慌てて近くの溝に伏せた。心臓がドキドキと波打って生きている心地がしなかった、ほんの一瞬の出来事で爆音が消えるまで数秒だったと思うがとても長い時間のように感じた。普段から防空訓練をしていたのでパニックになることはなかったが怖かった。幸い死傷者はなく登下校も無事に終えた。

強烈な出来事を思い出す度に命がけで戦う戦地の兵隊さんは怖くないのだろうかと思ったものである。学校では修身^{※1} という科目があってこのような怖い気持ちを克服して戦うことも「勇気」だと教えられた。

戦後の報道でわかったことであるが太平洋戦争末期に旧日本軍が本土決戦を想定した特攻隊の発進基地として全国 40 か所に^{ひとく}秘匿飛行場の建設命令を発令してその一つが近くの東伯郡高城村(現倉吉市高城地区)に突貫工事で極秘裏に建設されたが米軍には全て丸見えだったので爆撃の標的になっていたのかも知れない。

校庭はサツマイモ畑に、遊びは野草採りと魚捕り

昭和 19(1944)年頃から戦況は急激に悪化して国内の食料事情は^{きゅうぼう}窮乏を極め極度の食料難であった。非農家に生まれ育った私は配給の^{ごぶつ}五分搗き米や代用食のサツマイモやジャガイモの飯でまともなコメの飯は食べられなかった。学校では給食はなく、校庭は掘り起こしてサツマイモを作り収穫時に振舞われたが、訓練用の^{えんすいごう}円錐壕^{※2}や教練設備が作られたので遊びの場所は狭くなった。

下校途中では田畑の^{あぜ}畔や土手のノビル、アカザ、ヒユ、用水路や小川の^{ふち}縁に生えるセリ等の食べられる野草を採って持ち帰り食料にした。下校後は小川や用水路でニナやタニシ、シジミやカラスガイ、河川ではコイ、フナ、ハヤ等を捕って持ち帰ると母親の調理で食卓に上がった。自家で飼うウサギや鶏、池の鯉も貴重なタンパク源になった。動物愛護で

ペットにする昨今では考えられないことである。

日曜日は友達と山へ行きヤマユリの^{りんけい}鱗茎やヤマイモのむかごを採って持ち帰ると食料の足しになるので親に喜ばれた。

また、仲良しの友達と近くの^{いそ}磯に出かけて素潜りで岩ガキやサザエを捕った並外れの思い出が脳裏にこびり付いて忘れることはない。今時の小学生には親子共々話題にもならない数々のエピソードであるが戦時中でなく平和な世であれば^{さんしすいめい}山紫水明^{※3}、大自然の^{たお}嫺やかな生活風情だったであろうか。

令和 8(2026)年 8 月 12 日 記

※1 修身＝明治時代から第二次世界大戦敗戦（1945 年）まで、日本の学校（旧制小学校など）で行われていた道徳教育の科目名を指します。

※2 円錐壕＝主に太平洋戦争期に子どもたちの身体を鍛えることを目的に、学校の校庭などに掘られたすり鉢状（円錐形）の大きな穴

※3 山紫水明＝日光に映えて山が紫色に見え、川の水が澄んで清らかであること